

神戸市の西、須磨区の海岸部から北東にかけ、約30kmにわたって連なる六甲山は、大都市に隣接する日本では珍しい「都市山」だ。国立公園(瀬戸内海国立公園)の一部に指定されているのは、全国で六甲山だけである。

六甲山を活用する会(兵庫県神戸市)は、六甲山の環境や歴史、文化を知る機会を市民に提供、地域への愛着を深め、山上と山麓の交流を活発にする目的で、活動しているグループだ。

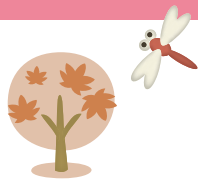
「1995年の阪神・淡路大震災により、街は壊滅状態になりました。復興で新たな街ができる中、故郷や地域の魅力が失われていく感じがして、背後にそびえる六甲山の自然環境を見直し、大事にしていこうという気運が市民の間で生まれたんです」と、代表幹事を務める堂馬英二さんは振り返る。

2001年9月、県知事の委嘱で兵庫県地域ビジョン委員会・循環型社会部会の六甲山部会が設けられ、堂馬さんらは「六甲山を活かす県民行動プログラム」を立案した。プログラム実践のために、「六甲山自然保護センターを活用する会」を03年4月に設立。六甲山の山上にある県立自然保護センターを使い、都市住民と六甲山の交流を開始した。活動領域が

折に周辺を散策し、ごみや荒れた森を目にしたからだ。自然歩道の補修、標識づくり、生い茂ったアセビの伐採、笹刈り、植生調査。対象面積を広げ、自然探勝ゾーンを作る構想が生まれた。整備した雑木林や歩道を「まちっ子の森」「森と歴史の散歩道」と名づけ、多くの市民に六甲山に親しんでもらおうと、ウォーキングや自然観察会を企画するようになった。雪の雑木林散策、モリアオガエル観察会、夏のパークレンジャー、秋のトンボ観察会など、多彩な自然体験を提供するこの活動は、セブンイレブン記念財団の助成を得ておこなわれている。「セミナーを15年続けた結果、六甲山通になりましたね。森づくりについては、昔の里山風景が戻ってきたという感想をいただいています。しかし、多くの山林が放置され、市街地から30分の距離なのに、都市住民と自然との乖離が起きている。山の住民は過疎化していますから、観光地に使うばかりでは荒廃が止まらない恐れがある。六甲山を支えるのは、麓に暮らす住民です。市街地と都市山を一つの地域として捉え、都市住民と六甲山との関わりを根本的に議論していく必要があると思います

## ただいま活動中 六甲山を活用する会

# 貴重な都市山の魅力を見直す



「六甲山知ろう!」パネル展を開催

右上=まちっ子の森デーでトンボ観察会。右下=冬は上池で氷の観察も。左=水辺の生きもの調べ



第129回市民セミナーは六甲山の景観計画がテーマ



上=自然観察会で、シュラインロードの野仏の解説。下=家族みんなで毎木調査



左上=森林ボランティアでこなうアセビ切り株の萌芽枝調査。左下=毎木調査で幹周りを測定。上=地面に区画を設定して実生の調査



六甲山物語  
セミナーの記録を  
A4判5冊に  
まとめた



広がり、09年5月に現在のグループ名に改称した。03年の発足後、まず始めたのが「六甲山魅力再発見市民セミナー」だ。03年4月、自然保護センターを会場にして第1回セミナー「六甲山のブナについて」を開催し、以降、月1回のセミナーを企画していった。

「六甲山に登るのはなかなか大変ですから、月例行事を仕掛けようとセミナーを企画しました。100〜200年後の六甲山のあり方を考え、第1回目は六甲生まれのブナを植樹されている松井光利さんに話していただきました。とにかく続けていくことが当初の目標でした」(堂馬さん)

山麓の歴史、森づくり、動植物、外国人居留地文化、レジャー……できるだけ多様な角度からバラエティに富ませようと、同じテーマと講師を繰り返さないことを基本方針にして、関心の赴くまま、セミナーの企画・運営を続けた。17年10月まで計132回を開催。最終回は「六甲山発郷土誌づくりの歩み」をテーマに堂馬さんが話し、雨天の中を42人が集まった。

セミナーで地域を知る一方、六甲山の環境を守る活動も開始した。セミナーの「まず」(堂馬さん)

発足から15年。セミナーの内容を記録し、『六甲山物語』と題して5冊刊行した。さらに、「特色」「歴史」「生きもの」「くらし」の4ジャンルに再編集して、「六甲山発郷土誌」の普及を図っている。図書館などに『六甲山物語』を寄贈し気軽に閲覧できるようにしている。

「僕は70歳を過ぎて、森の手入れや調査を続けています。まちっ子の森の体験活動で六甲山を好きになった家族が、調査を手伝ってくれることもあるんです。小学生の子を連れてきたりすると、僕らも調査が楽しくなる。ちゃんとやるなら、大人でも子供でも調査は同じで、子供にとっては調査が環境学習になる。これからの社会の担い手は子供たちですから、六甲山に関心を持って、のびのびと活用してもらいたいですね」(堂馬さん)

燃料や建材を供給する山として、街のシンボルとして、六甲山は人々にずっと恩恵をもたらしてきた。堂馬さんらメンバーは、これまでの知見を生かし、六甲山と都市住民とのつながりを見つめ続け、魅力を発信していく。

